

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

モンゴルの春：人類学スケッチ・ブック

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4579

22 坊さんと4WD

第二十二日め（四月六日）

午前五時すぎ。まだ暗いうちから、父がエルデニチメグ姉を起こして、たずねる。

「ホリスノー？」

ホリフは囲うという意味の動詞で、この過去形がホリスンで、さらにその疑問形がホリスノーである。つまり、囲ったかという質問である。ヒツジの群れを石垣へレムにいったかどうかを父はたずねている。即座に、エルデニ姉さんは、

「ウグイ」

とこたえた。いいえ、という回答である。

父は畜群のことを心配している。父は、若い世代のする仕事に手出しはしない。痛風で両膝が思うようにならないから、手伝いたくても手伝えない。しかし、父は、手伝えないのではなく、手伝わないのだという。手伝うことは、余計なことであると考えている、と断言する。だから、ますます、若いものたちの仕事ぶりが気になる。とりわけ、このところ子畜の死亡があいついでいる。さらにますます、牧畜作業のことが心配になる。そんなわけで、囲いに入れるべきだといわんばかりに、早朝からエルデニチメグ姉さんを起こして、質問した。

エルデニチメグ姉さんは、事実だけを回答したあと、

「あたたかいから」

とつけくわえた。

たしかに今朝はあたたかい。昨晚はまったく星がなかった。一つもみえなかった。曇天なのであたたかい。日の出まへの五時だというのに、戸外はマイナス十度のあたたかさである。

きょうは、町から外事局の4WD車がくる予定日。そもそも、わたしにとっては、町から車にきてもらう理由はとくになかった。また、たとえ来てくれても、その足で町にいくつもりもなかった。外事局の人びとが安心するためにのみ来訪が必要なのであった。

しかし、このあいだの喧嘩のことをおもうと、町へいったほうがいいかもしれないような気がする。異邦人というものは時々姿を消すかもしれない。だけど、町へいっても楽しくない。まさに、本格的な出産期をむかえたこの時期に、町へもどるのはくやしい。不在のあいだに、なにか大事なことをみのがするような気がする。ちょうど出産のせまっているウシもいるから、気になる。そのときしか観察できないものをみおとしてしまうようで、もったいない。一夜にして吹雪になれば、いつもどれるかわからないから、不安でもある。こんなふうに自分自身で、自分のことが決められないとき、往々にして自分に期待されていることがらによって、決めてしまうことがある。このときもそうであった。

父がわたしに期待していた。町からラマ僧をつれてきて読経をしてもらおうと計画していた父は、わたしが外事局の車で町へもどり、町で一泊してくることをのぞんでいた。金銭に不自由しない裕福な牧戸でさえも、これほど都合のよい車を用意するのはむずかしい。父の期待をうらぎらないために、わたしは風呂にはいることを口実に町へいくことにした。

「きょう、外事局の車がきたら、風呂にはいりに町までいきます。あしたもどってきます」



町からまねかれたラマ僧

モージ母は、わたしの意図に気がつきながらも、ことばの表面をとらえて、応じる。

「風呂かね。ありやいいもんだよね。わたしは、もう長いあいだ入っていない。あれば、ソヨルチンゲルがうまれたときだ」

と、昔の記憶をたぐりよせる。末息子のソヨルチンゲルを出産したとき、産後の肥立ちがわるくて、しばらく町で入院していた。そのとき、モージ母は、生まれて初めて、そしておそらく一生で最後の風呂を体験したのであった。

父のひそかな期待にそったつもりだったのに、頑固な父はあくまでも自力で車の手はずをととのえようとした。外事局は、来訪を約束してはいたが、かならず来訪してくれと当方から依頼していたわけではないから、確実なことはわからない。また、あの吹雪のあとでは、来訪がむずかしいかもしれない。それにしても、父はあくまでもわたしに期待しない。期待されていないのなら、風呂などのために町へいくのはばかばかしいのに。

午前十時。父はラクダにのって、どこかへいっ

てしまった。牛車もしくはロバ車の手配をだれかに依頼するつもりらしい。いつもなら午前中にくるはずの外事局の車がなかなかこなかった。

午後二時。ようやくイヌがほえて、車の来訪をつげた。車は、日本製の4WD車。外事局の車である。聞けば、外事局のスタッフは、いつものように午前中に出発したのだ、という。昼食をこの家でごちそうになる予定だったらしい。ところが、吹雪のあとの道中は容易ではなかったのだ。すっぽりと雪の穴におちて、穴からはいだすのに二時間も悪戦苦闘した、という。かれらに昼食がふるまわれた。やはり、きょうも肉うどん。いなかのごちそうは、おいしい。

昼食がおわっても、父がもどらない。母は気が気でなかった。父さえいれば、この車で町まで往復することができる。坊さんをむかえる車としてうってつけではないか。近くの知人の車をかりれば、気がひけるが、異邦人であるわたしの借りる車に便乗すれば、気が楽ではないか。母は、ぐちりながら、父の帰宅をまつ。

午後四時。父はようやくもどってきた。車を運転手つきで貸してもらおう交渉は、まとまらなかったらしい。手ぶらでもどった父とともに、わたしは町へ出発した。

町に到着すると、雪がふりはじめた。明日の帰還があやぶまれる。なぜか、町は断水していた。だからもちろん、風呂にはいるどころではなかった。とりあえず、電気だけはあったから、フィールドノートを整理する。

この日の、夕方の作業については、後日、嫁たちにたずねた。それによると、みなし子ヒツジが一匹ずつ、本家と分家に配分され、世話をするようになった。養子縁組をした白鼻の子ヒツジを本家がひきとり、他方の黒鼻を分家が世話することになった。



父にのるラクダ

さらに、ソヨルトの所有するヤギに養子をあたえた。けさ本家のヤギが双子を出産しており、そのうちの小さい方を養子とした。ソヨルトのヤギは四月三日に出産し、その子は翌日死亡していた。エルデニ姉が不十分な夜間の監視だったと反省していた、あの死亡である。もともと子ヤギのからだは小さかったから、小さい方を養子にした。こうして、ソヨルトの子ヤギはあがなわれた。死なせてしまったことの、おとしまえがつけられたのであった。

やがて、二匹のみなし子ヒツジの一件も落着くであらう。すでに本家と分家はそれぞれ一匹のみなし子をひきとっているから、ソヨルトには、かわりになる別のヒツジが、本家と分家からあたえられるであらう。それぞれ母と子のペアを一組ずつ、ソヨルトにあたえるであらう、ということであった。父がしばらく傍観しているのだといっていた一件は、このように落着くようである。

出産のせまっていたメスウシは、わたしの留守のあいだに出産した。そのウシを人びとは、セテ

ルティ・ウネーとよんでいる。ウネーはメスウシという意味である。セテルティとは、セテルとよばれる首輪をつけていることを意味する。首輪は、白、青、赤、黄、黒などの五色の布ぎれでかざられており、これをつけることによって聖化されたことになる。聖化された家畜は、一般に人間が使用しないものだが、ここではメス畜にかぎって、聖化しても使用する。使用するつもりメス畜がわざわざ聖化されたのは、このウシがかれらにとって意義深い存在であるからであろう。このメスウシのあゆんできたライフヒストリーが聖化されているのである。

セテルティ・ウネーは、あの雪害のあと、一九七八年に西スニト地方から購入された。当時五歳で、子ウシと一緒に購入された。以来、毎年体格のよい子をうんできた。いずれもオスで、みな大きく成長したので高価で売却された。ジョースタイ・マルすなわち「金になる家畜」をうんできたのである。いま手元にのこっている子は、三歳のまだらと、水汲みにつかっている黒まだらである。いつも、まだらの子ウシをうむ。現在十五歳になり、老いてきた。去年は不妊だったが、今年はまた出産した。はじめてメスをうんだ。メスの子ウシは、腎臓のあたりが白く、全体が赤い。その模様を人びとは、ボーログとよぶ。ボール（腎臓）とアラグ（まだら）という二語を合成して表現していた。

安産だったというその出産に、たちあうことはできなかった。